Ⅱ　検出遺構の報告

1　西院地区の調査

創建以来のいわゆる西院伽藍は，回廊によって囲まれた金堂・五重塔の一画とそれと一体をなす僧房などからなっていた。

その後の一千年をこす寺史のなかで，南大門，東大門，西大門はおのおのその位置を替え，現在では創建期の伽藍中枢部の約三倍の面積を西院とよんでいる。その範囲は南は南大門，東・西は東・西大門に囲まれた広大な地域で，若草伽藍跡もそのうちに含む。このため西院の調査の目的も導水管埋設地での西院の古い遺構の有無（たとえば北僧房の検出など）とともに子院の変遷をさぐることにもあった。

本年度の調査は主として，聖霊院の南側から綱封蔵の南を経て大宝蔵殿へかけての広場にトレンチを設定して実施した。

第26図　聖霊院南のトレンチ（東・西から）

A　トレンチの位置

トレンチは上幅1.5メートルを標準とし，大宝蔵前（西側）の現在敷石参道北縁に平行する約10メートルは境内の老松樹との関係で上幅1.0メートルとなった。食堂・細堂と南側部分（約35～40m南側）は掘立柱掘形の検出に伴なってトレンチの一部を北へ約7m拡張しその性格を確認するようつとめた。この地区は明治の中期以降は現在みるような広場となっているが，それ以前多くの子院が軒を並べていた。いま明治3年9月の図面（高田良信『法隆寺子院の研究』1980年第87図）によると金剛院，実相院，政蔵（倉）院があった。これらの建築が移転または取りこわされたあとにも庭園の石組の一部や老樹が残されている。

B　基本的土層と遺構

今回の調査地域では，現地表は聖霊院の部分が高く，東へ低くなる。さらに北から南へも低くなる。トレンチの西端と東端では約1メートルの高さの差がある。地表面は小砂利が敷きつめられており，その下に厚さ5～10センチの各種の山土・砂利・砂からなる参詣客通路の整地があり，この上面，あるいは途中から掘り込まれた電線，水道管，火災警報装置用ケーブル，下水管などがいく本も埋設されている。これより下部の土層は調査地内において，著しい違いがある。(以下説明の便宜のため現在の聖霊院・妻室，綱封蔵のおのおの南側にあたる地域を，まとめて聖霊院南と表現する)。

綱封蔵南から東側では近世の生活面に伴う遺構があり，それより西方では，近世の層は非常に薄く，いわゆる層位をなしていない。これは東側にだけ子院があったことに起因しており，発掘調査によってこのことを確認したことにもなる。

平安時代から室町時代にかけての土層は，近世の土層のあり方とは逆に聖霊院南から綱封蔵南にかけて認めることができ，東側は近世の遺構による削平などがあって少ない。奈良時代およびそれ以前の遺構は，聖霊院南および食堂・細殿南において検出することができた。この下層は地山層で，綱封蔵南から食堂・細殿南にかけては現地表下0.5～1mであるが，聖霊院南とトレンチ東端部では現地表下2.5～3mと深いところに認められた。

地山の高い部分は一様に黄褐色で硬質の粘性の強い山土である。低い部位の地山は砂または粘土で，水もちは非常に悪く，発掘中の湧水も著るしく，この部分が法隆寺以前の旧谷筋であることを示している。妻室北半の東側，綱封蔵中蔵西側に地下埋設の避雷針の接地板の掘り形（50×80cm，深さ3m）の立会調査による土層検討の結果，この部分の土層が安定した硬質の地山であることを確認した。聖霊院の解体修理に伴う調査によれば聖霊院の南部は地山が大変深いことが確認されている。

C　検出遺構

i　近世の遺構

ＳＢ2141　トレンチ東端部の大宝蔵殿西側で検出した方眼方位に対してＮ68度Ｗで自然石

を東北側縁石としてもつ基壇である。検出した縁石は8個で，その全長は2.8mである。子院に伴うものであるがその方向は塔頭のそれと一致しない。

ＳＡ2112　食堂・細殿南の拡張区で検出した東西に築いた築地基壇である。これには2時期あり，上層をＢ期とし，下層をＡ期とする。Ｂ期は現在の小砂利敷歩道面直下で検出した。上幅1.2mの土積を残す。明確な基壇は伴わない。Ａ期の崩壊した土塁状の高まり上に直接きずいている。これは明治期まで存在していた金剛院・政蔵院などの北面築地の痕跡と考えられる。

ＳＡ2112Ａ　Ｂ期築地下の高まりで上幅は1.0mある。地山上に直接積土している。Ａ，Ｂ期ともに，Ｎ76度Ｅの方向にある。

ＳＥ2114　大宝蔵殿前で検出したくり抜き井筒をもつ井戸である。直径1m，深さ0.9mの掘り形中央に，直径0.45m，高さ0.6mの広葉樹の巨木を刳り抜いて井筒とする。この井筒の上に底の抜けた大型の瓦質の釜を重ねておく。両者を合わせた高さは0.9mである。木製井筒にひび割れが見られるが，ここには針葉樹の小材を外からあて，さらに，上下2段に井筒を縄で緊縛する。

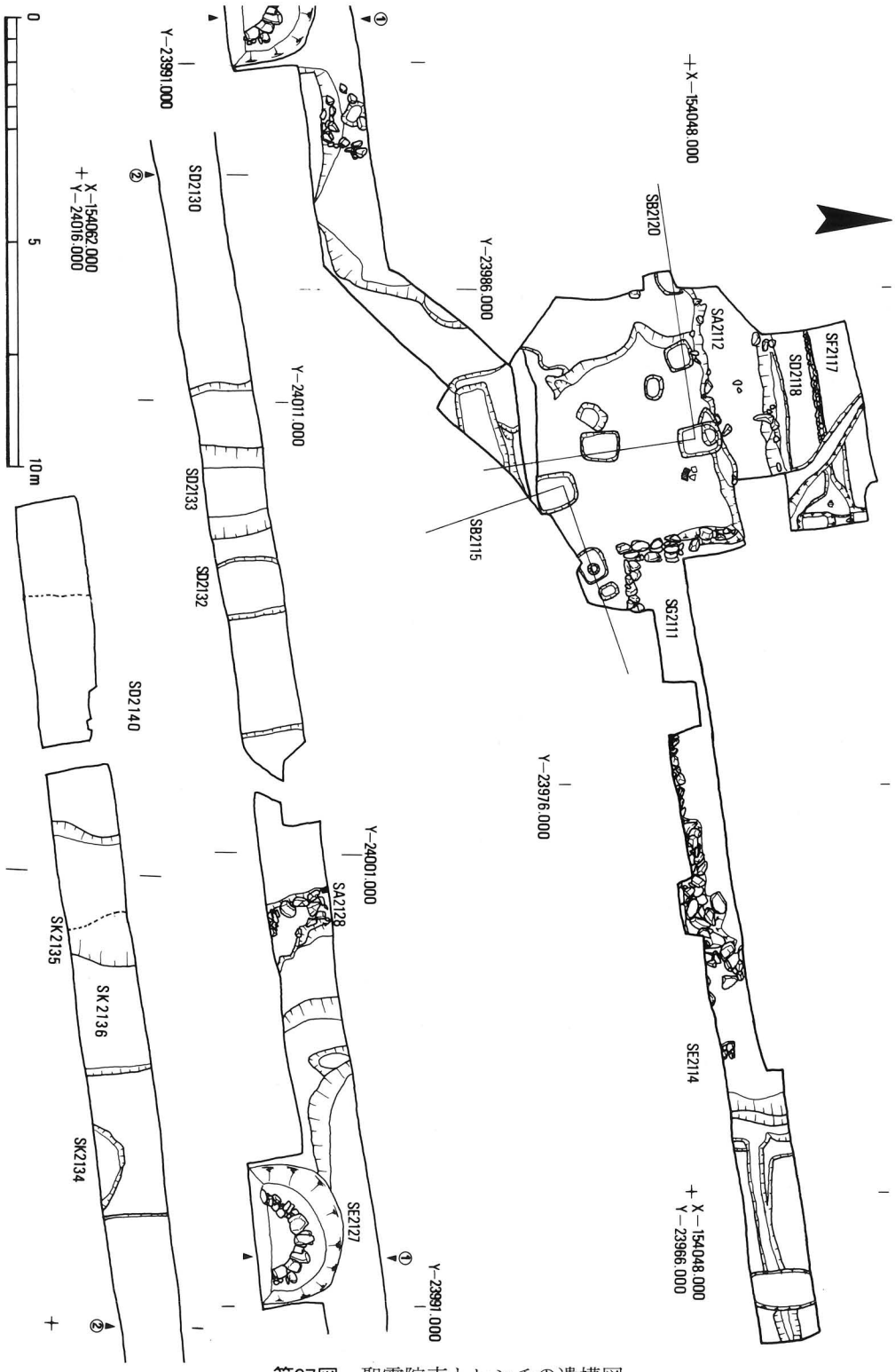
ＳＡ2128　ＳＥ2127の西方6mで検出したＮ80度Ｗの方向にふれる南北築地の基礎である。明治3年の絵図から，金剛院・実相院の西側土塀の一部と考えられる。

ＳＥ2127　拡張区の南西で検出した石組井戸。掘り形，石組ともに南半部が旧防火用水道管バルブにあたり，崩壊のおそれもあったため，全体の発掘はできなかった。掘り形は上縁で直径約3.2m，底で約2.8m，深さ約2.2mで，掘り形の底は，地山中の黒色粘土を掘りぬき，その底の砂層にくい込んでいた。石組は高さ0.7mを確認したが，ボーリングの結果によると更に約1.5mはあるようで，本来4～5mもの深さをもつ本格的なものである。石組の大部分は井戸廃絶時にぬきとられていた。石組は大きいもので30cmぐらいの幅をもつ自然石を乱石積したもので井戸側石はほぼ垂直に組まれている。この井戸は明治3年の絵図によると金剛院のものとしてよいが，同図には井戸の表示がない。井戸側石内部からは細片化した土師質小皿片，瓦片などが出土した。

ⅱ　中世の遺構

ＳＧ2111　石組の護岸施設をもつ池遺構である。池は方形，東西の長さ13.5m，南北の長さ8m以上で，東端に幅約30～35cm，深さ約30cmの木樋埋設用の溝を検出した。石組は南辺部と西辺で検出した。東辺部はすでに破壊され，石の抜きとり痕跡によって岸を確認できた。池の護岸は西岸で高さ30～80cmの扁平な自然石を選んでたてている。南岸では，西壁との交点付近はたてているが，東にゆくに従いやや深くなるところもあり，4～5段積みあげている。積みあげはあまり丁寧でなく，一見したところ西岸のたてたものとは異質にみえる。石質はともに在地の小石塊であるが，東岸近くで凝灰岩を1個転用していた。

この池の廃絶後，池を埋めたてて整地している。この整地は厚さが1mにも及ぶ部分が



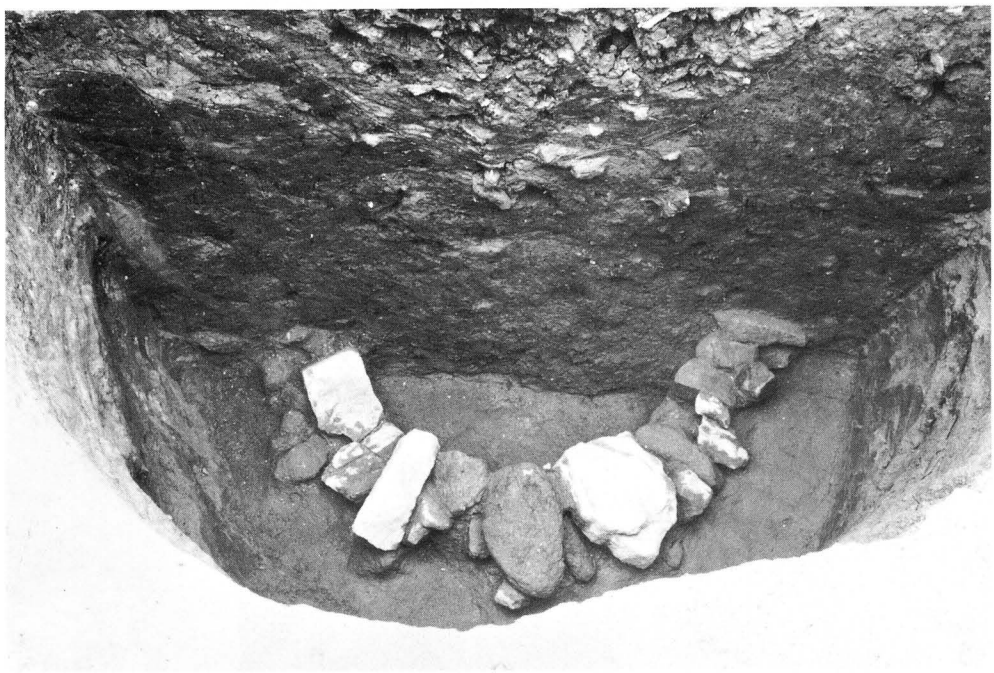
第27図　聖霊院南トレンチの遺構図

第28図　築地 SA 2112 と道路 SF 2117（西南から）

第29図　池 SG 2111（北から）

ある。整地土は黄褐色の山土をよく搗き固めたもので，水分を含んど含まない一見したところ古代の整地土とも思われるものである。整地土から埴輪片，古墳時代の紡錘車および銅の小片を検出した。整地の範囲は南側を大宝蔵殿前の敷石参道，北側を樹木に囲まれて未確認に終ったが，池遺構を埋めたてて子院北辺整備をしたものであろう。

第30図　掘立柱建物 SB 2120 と SB 2115（東から）

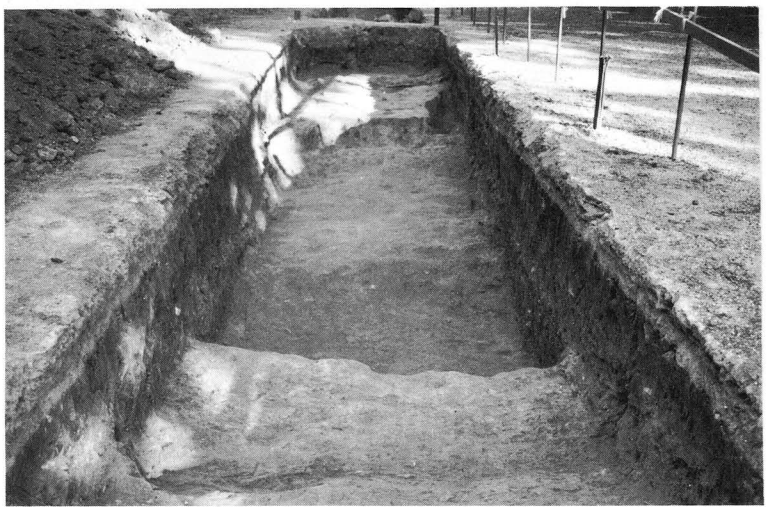


第31図　井戸 SE 2128（北から）

ＳＦ2117　食堂・細殿南の拡張区北端で検出したＮ80度Ｅのふれをもつ道路側溝の石垣。この石垣より北側を道路と推定した。道路の北端は，綱封蔵の南側を東西に流れる水路によって確認されている。側溝はＳＡ2112Ｂとの間にできた凹みで，幅約80㎝，深さ約50センチ前後の断面Ｕ字型を呈する。石垣は小型の自然石を３～４段積み上げたもので，残存

第32図　SB 2120 と SB 2115
（南から）

第33図　SB 2120 と SB 2115
（東から）



第34図　平安時代の土壙 SK 2135
（西から）

第35図　聖霊院南のトレンチ
（西から）

第36図　大溝 SD 2140
（東から）

状態は非常によい。これにつづく道路状遺構は断面形かまぼこ形を示す。遺構の状況から土器を伴わないので明確な時期決定はむつかしいが，上限はＳＦ2117に関連する。SA2112Ｂ出土の土器片等によって室町時代中期以降におさえることができよう。

ＳＤ2133　綱封蔵南で検出したほぼ方眼方位に平行する南北方向の素掘り溝で上幅2.1 m下幅約1 m，深さ6 mの断面U字形の堀である。堀内の推積土は薄く，この上に黄褐色の硬質の山土で一気に埋め込んでいる。子院に関する中世の堀であろう。

ＳＫ2136　トレンチ壁面で確認した土壙。聖霊院の南から妻室の南にかけて厚さ15～20cmの瓦器を含む土層がある。トレンチ内では完結しなかったが大きな土壙である。この土壙の近くには小土壙（ＳＫ2134）もある。これらは室町時代の範囲内におさまる。このうち聖霊院南の土壙ＳＫ2136からは忍冬文飾りをもつ鴟尾片が出土した。

ⅲ　古代の遺構

ＳＫ2135　室町時代の土壙（ＳＫ2136）の下層に平安時代前半の土器を伴う厚さ約10cmの土層がある。これは焼土・灰を含む黒褐色土の土壙の埋土で，二彩釉片，三彩釉片・獣脚硯などが出土した。この土壙は西端は明らかな落ちがあるが東端では薄くなり消滅する。

ＳＢ2120　食堂・細殿南の拡張区で検出した掘立柱建物で，２間分の柱掘形を検出した。掘形は，桁行が長方形（0.8×0.6m）で，梁行は正方形（１辺0.55m）である。柱間寸法は桁行で2.1m，梁行で1.8m である。棟方位は西院と同じふれをもつ。

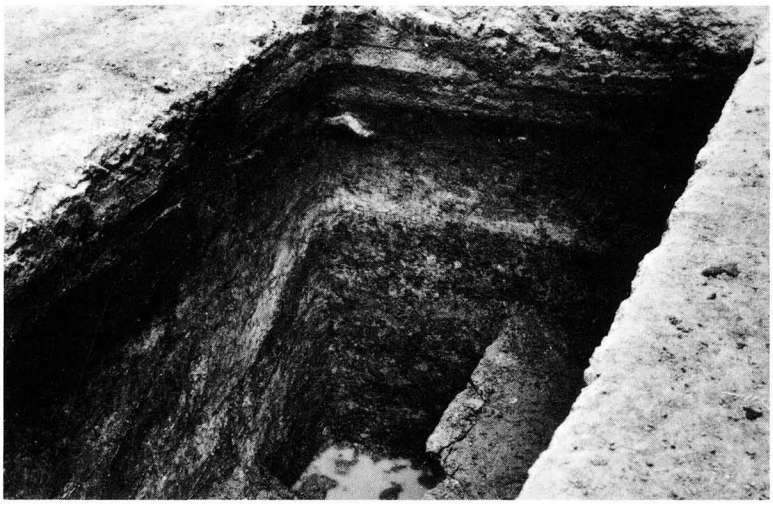
ＳＢ2115　ＳＢ2120の東で検出した掘立柱建物である。東西に並ぶ柱掘形（１辺0.7m ）２個を検出したにすぎず，厳密にいえば塀の可能性もある。東の堀形には柱痕跡（直径24cm）が認められ，木片が残存していた。この掘形から，７世紀前半の軒丸瓦が出土した。

以上２棟ともに奈良時代前半に建てられたもので，柱掘形の大きさからみておそらく雑舎的性格をもったものと考えられる。

ＳＤ2140　聖霊院前面にあたる位置で南北方向の大溝（幅８m，深さ2.6m）を検出した。東岸は固い地山を掘りこむが，西岸はゆるやかに高まり，聖霊院東側柱筋の延長線あたりに位置する。妻室南から聖霊院南にかけては旧地形が深く，川または谷状を呈することは東室の下層調査によって知られている。また，南大門東側の大垣下層で焼土層が検出されていて，谷を埋めたのではないかと考えられていた。

この谷は西方から埋めたてられており，幾層もの整地土が西から東へおおいかぶさっている。これは西院伽藍の造成に際して，削平した土砂で谷を埋めたてていたことを示している。この谷の埋土は，粘性の強い山土で，他の夾雑物を全く含まずに埋められているので，一気に人為的に埋め戻されたことを示している。溝の底面のヘドロ化した粘性の強い山土層から多くの瓦片や，ガラス小玉１点が出土した。この谷の埋土の上部に厚さ10センチ前後の焼土・木炭片・灰とからなる黒色の土層がある。谷底出土の瓦の大部分は若草伽藍のものであるが，７世紀末の土器を含むので，谷の埋立てのおおよその時期を示してい

る。焼土は他の場所から二次的にここに投入されたものである。また焼土・灰などの層は東が厚く，西は薄く分布する点から考えて，東方から投棄されたと考えてよい。発掘面積が狭いので，断言しがたいが，溝の埋立てが西方よりされ，各種の廃棄物の投棄が東方よりされたことは，溝より東において焼失した建物の廃棄物であった可能性が考えられる。



第37図　大溝 SD 2140 の堆積土（東南から）

第38図　大溝 SD 2140 の堆積土（北から）

2　東院地区の調査

東院地区回廊外では，新管埋設予定地全域について幅1.5mのトレンチ調査を行なった。一部，斑鳩宮・東院関係の遺構を検出した部分では，管埋設位置の変更の移動を考慮して，トレンチを拡張し，遺構の範囲確認を行なった。

東院回廊内は，周知のとおり，昭和9年から16年にかけて，東院礼堂，回廊，伝法堂，舎利殿および絵殿の解体修理に伴う地下遺構の調査によって，重要な遺構が検出され，その配置も明らかになっているので，旧管の位置に新管を埋設する事になった[5)]。したがってトレンチは，旧管埋設時の掘形を復原する形となり，トレンチ壁面の土層の上から東院地区の整地状況を把握する事に重点をおいた。顕著な遺構が検出されたいくつかのトレンチについて概要を記すことにする。

A　伽藍内の調査

ⅰ　西面大垣内側トレンチ　四脚門外の北寄りから西面大垣沿いに南北方向に設けたトレンチである。検出した主な遺構には，東西大溝ＳＤ1300，井戸ＳＥ1287，池ＳＧ1290がある。

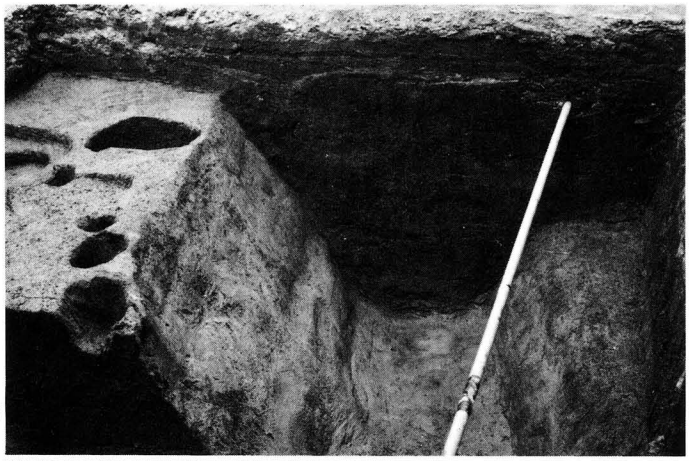
ＳＤ1300　トレンチ南端で検出した東西大溝である。幅約1.6m，深さ1.8mの横断面「U」字形を呈する素掘り溝である。ＳＤ1300はかつて斑鳩宮跡と推定されている遺構を検出した地山面から掘り込まれ，少量ではあるが埋土内に7世紀末から8世紀前葉の土器片を含む。ＳＤ1300の延長部は，回廊内の82―2―Ⅱ・Ⅳトレンチでも検出した。方位は，国土方眼北に対し，西で南に約14度偏する。この方位角は東院地区の斑鳩宮跡と推定されている掘立柱建物の方位とほぼ一致する。

ＳＧ1286　トレンチ北端で，池ＳＧ1286の西岸と南岸の一部を検出した。西岸には，丸太の横木を杭でとめた護岸施設が見られる。ＳＧ1286は，81―10―Ⅶトレンチで検出した沼状の遺構と一連のものであり，堆積土から江戸時代の土師器の小皿・羽釜・陶磁器片が出土した。ＳＧ1286は，元和年間～貞享元年の間に製作されたと考えられている「伽藍境内大絵図」の鐘楼北側に蓮池と書かれた池に対応するものと考えられよう。なお，寛政年間製作の「法隆寺惣境内之図」には，同場所に，池は描かれていないが，鏡池なども描かれていないので，この時に埋めたてられていたとは決めがたい。

ＳＥ1287　池の南岸近くで，曲物側板を積み重ねた形式の井戸ＳＥ1287を検出した。曲物板は2段残存していたが，枠内からは，奈良時代の土器片が少量出土したにすぎない。周辺が後世の攪乱を受けているため，掘られた年代は不明である。

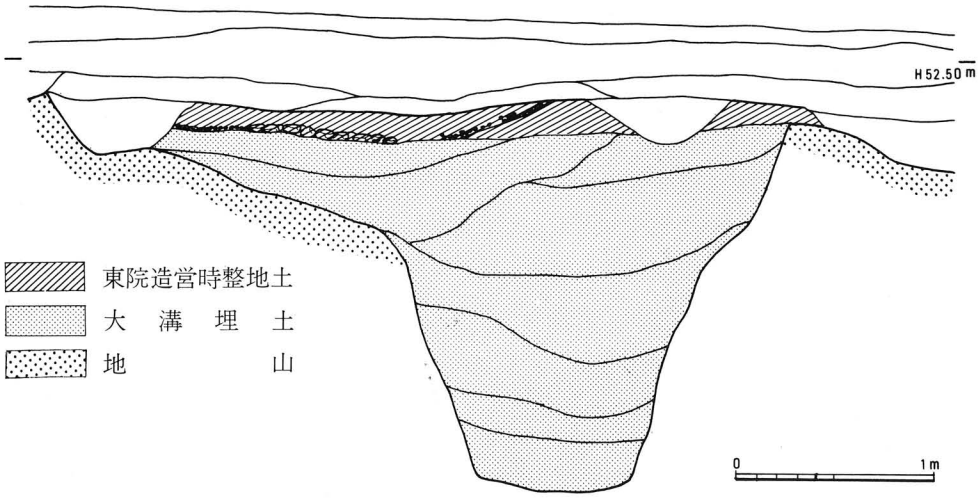
ⅱ　回廊内トレンチ　回廊内トレンチで検出した主要な遺構は，東西大溝ＳＤ1300の延長部と創建当初の掘立柱掘形，石敷，夢殿南面の凝灰岩，参道である。

ＳＤ1300　82―1―Ⅰトレンチで検出した溝の延長部である。そのトレンチでは，この溝



第39図　大溝 SD 1300
（西から）

第40図　大溝 SD 1300と
東院創建時の石敷
SX 1307（西から）



第41図　大溝 SD 1300の土層図

の上面に東院創建時の石敷面があり，溝の埋土上層から，瓦片と焼けた壁土が出土した。

ＳＸ1310　夢殿の南面階段前の灯籠直下に長方形（1.0×0.5m，厚さ0.2cm）の凝灰岩が据えられていた。凝灰岩は，旧防災管の埋設時に北半分が壊され，現状は東西に長い。１辺約1.3mの掘形を掘り，礫・粘土で地固めした上に水平に据えている。この石周辺には，石の表面にレベルをそろえる石敷が残る。

ＳＦ1340　ＳＸ1310の中心から東西にそれぞれ２m離れた位置に石組溝ＳＤ1330・1320がある。東側溝ＳＤ1330（幅44cm，深さ20cm）は底に礫を敷いている。西側溝ＳＤ1320（幅60cm，深さ20cm）も底に礫を敷くが残りは良くない。両側溝の心々距離は4.3mである。両溝間は参道（ＳＦ1340）である。

なお，82―２―Ⅱトレンチで，創建時の掘立柱の回廊の掘形１基を確認した。

Ｂ　東院南門前地区の調査

検出した主な遺構は，南門前の東西道路，明治時代の町屋の敷地石積２基，江戸時代の池状遺構１基，古墳時代の溝１条である。

ＳＢ1395・1396　東西トレンチ東半分で検出した敷地基礎の石積である。いずれも北面の東西方向の石積で，両石垣は，ほぼ面をそろえる。石垣の底部には，丸太の胴木が敷かれている。東側の石積の0.3m離れた北側にも１列の胴木が残り，町屋の敷地が縮少されていたことを示す。

東側の石垣基壇長は，約10m，西側のそれは13mを測り，両基壇間には，幅３mの露路が設けられている。両基壇とも，丁寧な版築を施し，版築土は，南へのびるトレンチの南端にまでおよび，南北幅については不明である。

ＳＧ1410　Ｂトレンチ西辺部からＦトレンチにかけて検出した江戸時代の池状遺構である。堆積土から，石仏，土師器小皿・羽釜，瓦器，陶磁器類が出土している。Ｆトレンチでは，現地表下1.6mに至っても底が出ず，軟弱な堆積で湧水があり，危険なため，深さについては確認できなかった。この池状遺構は，現南面大垣下に延びていて，現大垣を築造した元禄９年（1696）か，それ以前に埋立てられている。

近在に住む明治生れの古老から，小さい頃，焼門の東に池があったという聞込みが得られ，この池状遺構との関連を示す話であるかと思われる。

ＳＤ1390　Ａ・Ｂ・Ｅトレンチの江戸時代整地土下の地山面で，古墳時代の溝１条を検出した。各トレンチで検出した溝は，一連のもので，東南方向に流れる。その埋土から，庄内式と思われる土師器片が少量出土した。なおＡトレンチの溝周辺の整地土からは，埴輪片が少量出土した。

Ｃ　北室院地区の調査

ｉ　81―10―Ⅰトレンチ　トレンチの基本的な層序は，表土・暗茶褐色砂質土の順で暗黄褐色粘質土（地山）に至る。地山の上には，部分的ではあるが，土器の細片を含む東院

第42図　参道 SF 1340 と凝灰岩 SX 1310（北から）

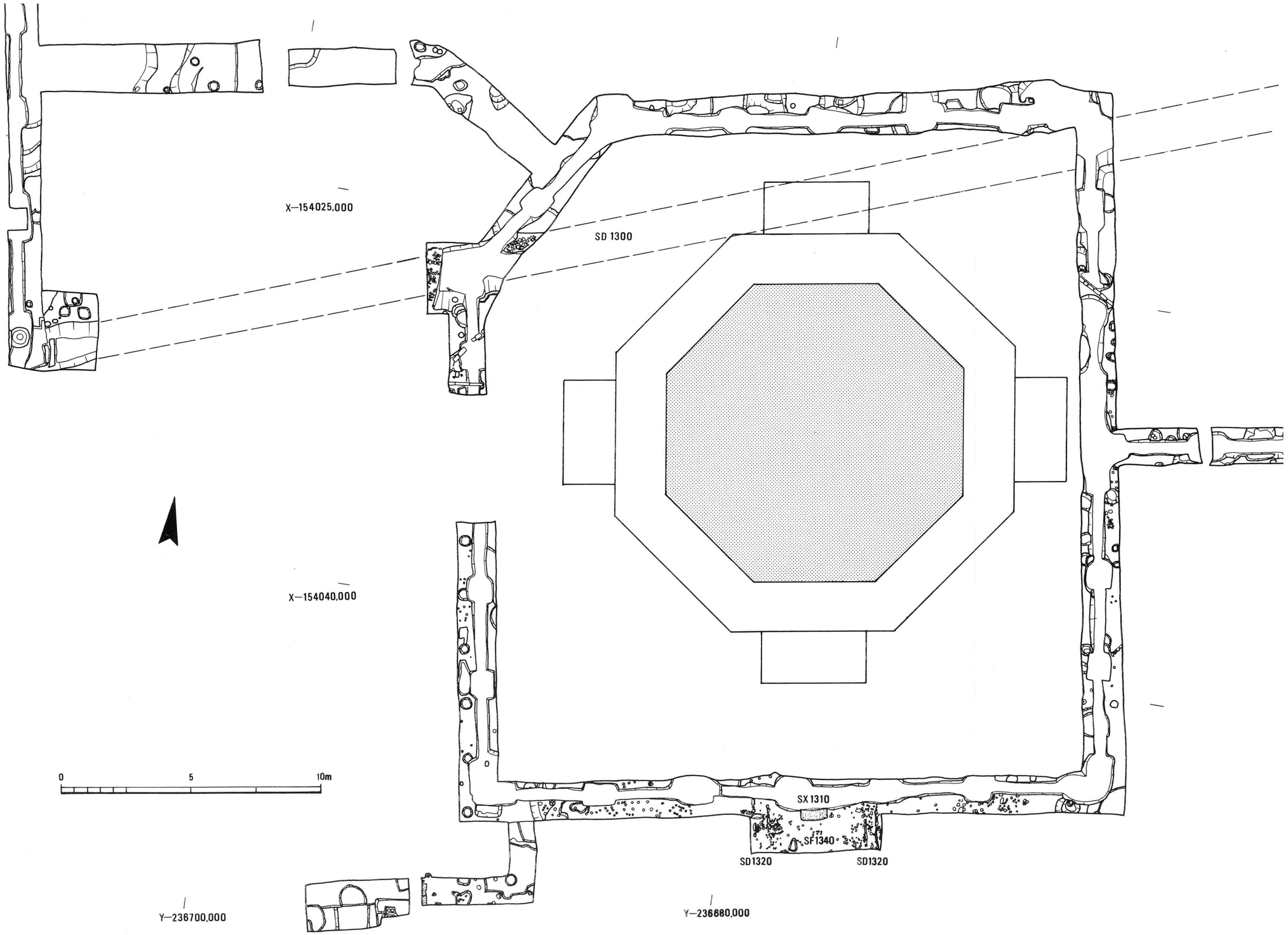
第43図　参道 SF 1340 と凝灰岩 SX 1310（東南から）

第44図　池 SG 1286（西南から）

第45図　民家敷地基礎
（東から）

第46図　民家敷地基礎と
胴木（北から）

第47図　溝 SD 1390
（南から）



第48図　夢殿周辺の遺構図

造営時の整地土（黄灰砂質土）が残っていた。

検出した主要な遺構は，掘立柱建物3棟，掘立柱塀4条，平安時代の土壙1基，室町時代の土壙と井戸各1基，江戸時代の素掘り溝2条，明治時代の石組溝1条である。明治時代の石組溝は，明灰褐色土面で検出し，室町時代の土壙ＳＫ1205は，灰褐砂質土面から掘り込まれ，中から多量の土師器の小皿が出土した。トレンチ西辺部にあたる平安時代の土壙ＳＫ1230は，径約7.5m深さ約0.3mの浅い皿状のくぼみで，黒色有機質土を埋土とし，多量の土器・瓦片・石が入っていた。土壙の肩近辺には，杭がうち込まれており，所々に石が据えられている点から，園池の可能性がある。ＳＫ1230は，東院造営に伴う整地土から掘り込まれている。ＳＡ1221は，ＳＫ1230の埋土を切って掘り込まれているが，掘立柱建物ＳＢ1210・1220は，土壙ＳＫ1230の埋土下の地山面で検出した。

ＳＢ1200・1210　国土方眼方位に対して，北で西に約8度30分偏する方位角を持つ掘立柱建物である。ＳＢ1200は，桁行8尺・梁行6尺の東西棟建物に復原できる。妻柱の掘形底部には，礎板として平瓦が敷かれていた。ＳＢ1210は，桁行3間（7尺等間），梁行2間（6尺等間）の南北棟建物である。妻柱掘形には，平らな石が礎板として使用されていた。ＳＢ1200・ＳＢ1210の掘形は，一辺0.5m程度の小規模な掘形で，いずれも柱抜取り痕跡はなく，埋土には灰と炭が入っている。また一部の掘形からは，奈良時代の土器が出土した。建物方位・出土遺物等の検討から，両建物は東院の雑舎と考えられよう。

ＳＢ1220　ＳＢ1220は，柱間10尺（3ｍ）等間で，梁間2間の東西棟に復原できる。妻柱の掘形から，奈良時代の軒平瓦が出土した。東院の僧房の可能性もある。[6)]

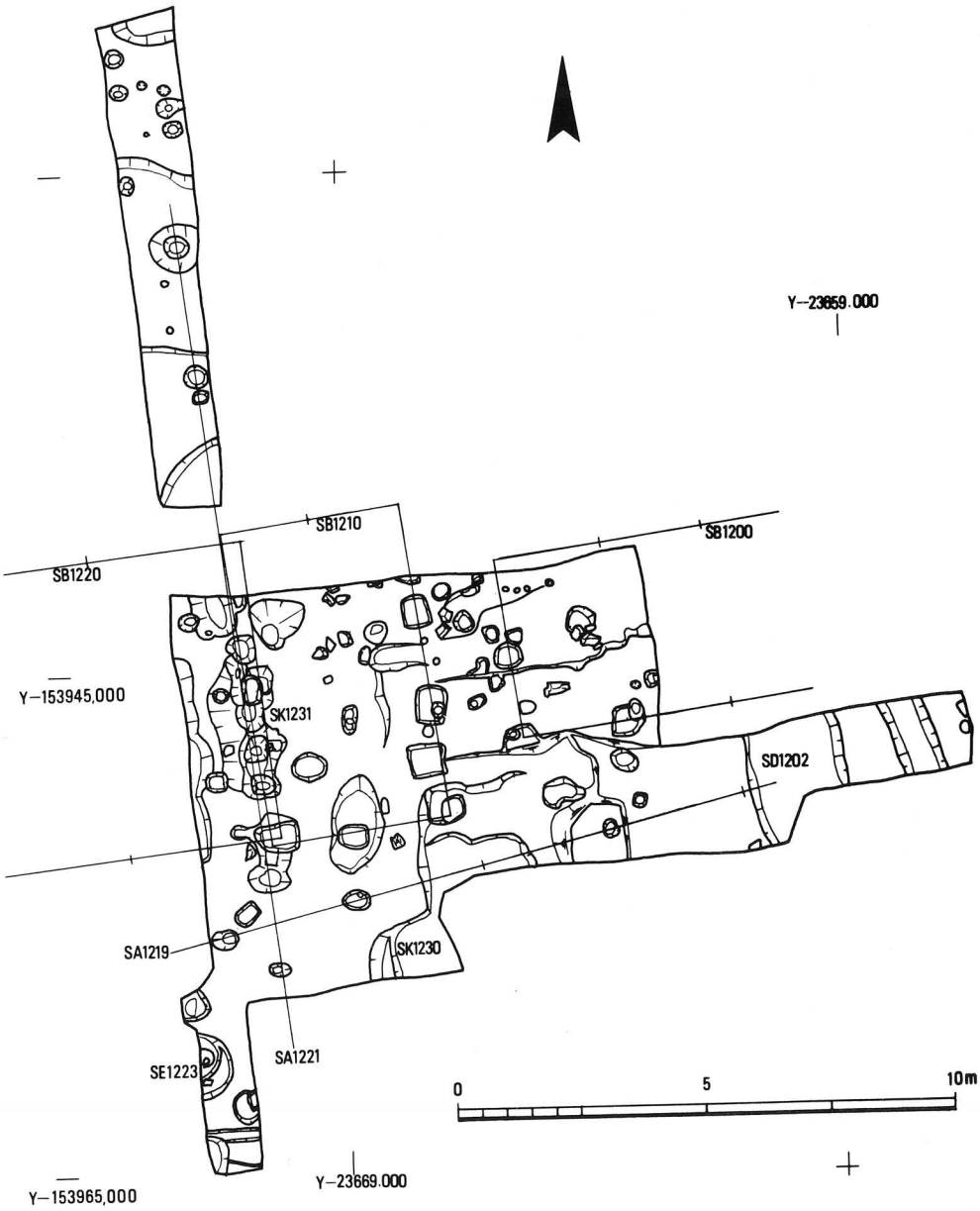
ＳＡ1221・1222　ＳＡ1221は西側にある現築地塀と同方位の掘立柱塀である。両者は近接した柱穴列で，築地造営時の足場穴と考えられる。この築地塀は寛永の頃の状況を描いたと思われる「伽藍境内大絵図」にも描かれており，検出面からも中世から江戸初期の築地築成時の足場穴の可能性が高い。ＳＡ1221の西1ｍには，同様な柱穴列ＳＡ1222がある。

以上の掘立柱塀と建物は，検出層位と重複関係から3時期に分かれる。ＳＢ1200・1210はＡ期で最も古く奈良時代の建物である。ＳＢ1220はＢ期で，11世紀頃までには廃絶している。ＳＡ1221・1222はＣ期で時期が降り，江戸時代初め頃と考える。

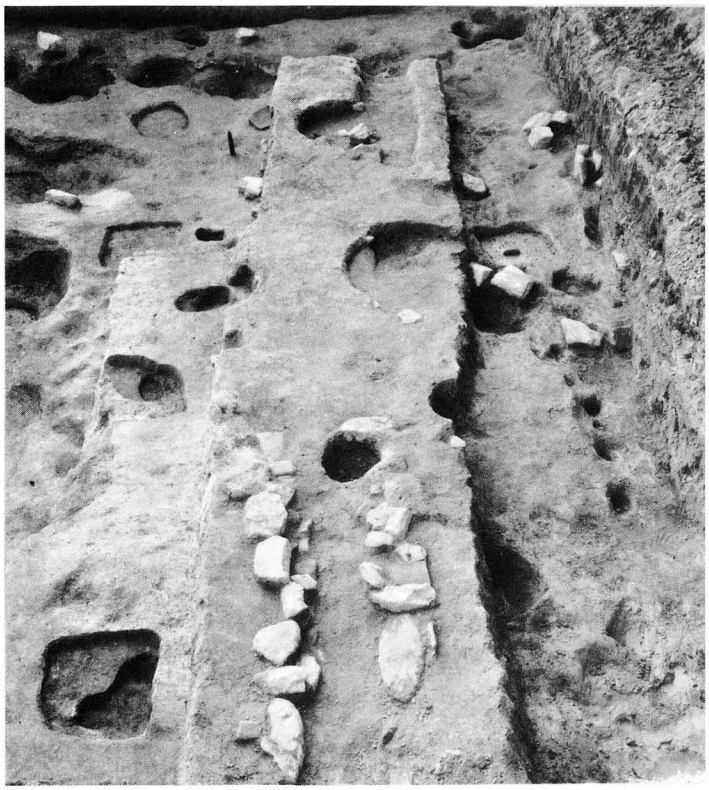
その他の遺構　ＳＡ1219は，地山面で検出したが出土遺物がないため時期は決定できなかった。トレンチ東辺の素掘り南北溝ＳＤ1220（幅2ｍ・深さ0.6ｍ）は，室町時代から江戸時代の遺物が出土した。トレンチ南辺のＳＥ1223は，径40cm・高さ45cmの円筒形の瓦質井戸枠を5段以上積み重ねた井戸である。

ⅱ　81—10—Ⅲトレンチ　北室院の西側築地に沿って設けたトレンチである。その南端部に奈良時代の土壙ＳＫ1270を検出した。ＳＫ1270からは，丸瓦・平瓦・土師器・須恵器が出土した。

ⅲ　82—Ⅰ—Ⅱトレンチ　「伽藍境内大絵図」によれば，このトレンチの位置には現本



第49図　北室院地区の遺構図



第50図　北室院地区の遺構（東から）

第51図　井戸
SE 1223（北から）

堂に取り付く庫裏があったとされ，また寛政の古図「法隆寺惣境内之図」には，台所と食堂が描かれている。

ＳＤ1240　石組溝で，埋土に染付片を含んでおり，上述した江戸時代の塔頭の雨落溝と考えられよう。ＳＤ1240は，ある時期改修され，若干東に移動している。トレンチ東端でも，同様な石列ＳＸ1245を検出した。レベル的には，ＳＤ1240の古い時期の石列面に対応する。

ＳＤ1250　トレンチ東端で検出した，地山面から掘り込んだ深い溝状の落ちである。西肩を検出したにとどまり，深さ・幅については不明である。埋土中には，７世紀代と考えられる土器片が含まれている。この溝は東院伽藍地区で検出した東西大溝ＳＤ1300と同様，斑鳩宮の区画溝の可能性がある。

Ｄ　小　　結

幅の狭いトレンチながら，東院の各所にトレンチが入る事になり，その結果，東院地区の旧地形（古墳時代以前）・東院造営時の整地のあり方についても興味深い知見を得た。

旧地形は，北室院西北部が最も多く，最高所の海抜高は54.485m を測る。北室院西北部から，東および西にかなりの傾斜で低くなっているが，北室院で奈良時代の遺構を検出した地山面の海抜高は，54.50m 前後であり，地山は夢殿付近まで緩かな平坦面で続く。夢殿付近と北室院の奈良時代の遺構面（地山）との比高は，わずか10cm前後である。夢殿から南は次第に傾斜が大きくなり，夢殿の南階段の南約５ｍの位置から，急激な崖となる。また崖下から急激な斜面地形となる。夢殿南の崖面下と東院南門前の地山面の比高は，約2.5ｍである。この傾斜地に西北から南東に流れる古墳時代の溝がある。

今回の調査で検出した斑鳩宮時代のものと考えられる東西大溝ＳＤ1300は，この崖面から約18m 北の位置にあり，旧地形の状況から考えて，斑鳩宮の南限を画す溝の可能性が大きい。また北室院太子殿北から夢殿までの平坦地は，斑鳩宮・東院の造営にあたって，地山を削平し造成したものである。

北室院の82―１―Ⅱトレンチでは，東肩を検出していないが，ＳＤ1300と同様な性格と考えられる南北方向の溝状遺構ＳＤ1250を検出しており，これを斑鳩宮の東限を画す溝と考えれば，斑鳩宮の位置はかなり限定されることになる。東院と西院中間地区の善住院，羅漢堂あたりの地山のレベルは，東院南門前のレベルに近いことから，本来，斑鳩宮は南側に突き出した低丘陵の突出部に営まれていたと考えられよう。

東院伽藍は，斑鳩宮の南面に敷地を継ぎ足す形で造成されている。整地は，自然地形に従い北が薄く，南に向って次第に厚さを増す。夢殿の南の崖からは急に厚さを増し，中門から南門に至る地域の整地土の厚さは，2.0～2.5m にもおよぶと考えられる。旧地形・整地状況のあり方から東院の造営は，単に斑鳩宮跡を伽藍に再利用したのではなく，かなり大規模な造成工事を伴っていたことに注意したい。

東院伽藍の規模については『東院資財帳』に，寺地の東西辺が各47丈，南北辺が各52丈と記されているが，その範囲にはいろいろな考えかたがあった。たとえば，南門前の通路が古い道の痕跡をとどめるものとして，ここを南限とし，北限を伝法堂と北室院の間におく考え，東西については，現在の西面築地を西限とし，ここから52丈東方，すなわち現中宮寺の東の端よりも東方を東限とする考えかたなどである。しかし，今回の発掘調査によって北室院内や福生院内から，東院伽藍の方位に一致する掘立柱建物を検出したことは，東院伽藍の北辺部に北室院のほとんどを含めねばならないこと，西辺部に福生院も含まれることが明らかとなった。

時期については確定できないが，82－2－Ⅱトレンチで小石を多量に混えた小土壙を数基検出し，埋土から施細陶器片が出土している。また，同トレンチ内では直径10cm程度の小穴群を検出している。これらの遺構の性格を解明していくことも今後必要なことである。

以上のように，この東院地区では，北室院では東院伽藍に伴う雑舎，回廊内では，斑鳩宮を区画する素掘り大溝を検出でき，戦前の調査で判明していた夢殿に向う参道など東院関係の遺構を再検出した。また，旧地形の復原から，東院の造営に関する新たな知見がえられるなど，東院の歴史を考えるにあたって貴重な資料を提供することになった。

第52図　礼堂北側の小穴群

3．中間地区の調査

西院と東院をつなぐ参道をはさんで，北は律学院，宗源寺，福園院，福生院の子院周周辺と，南は聖徳会館東口から東大門までに新たに導水管が埋設されるため，そのルート前に沿って発掘調査を行なった。

この地域を中間地区とし，北を律学院・宗源寺周辺地区，福園院周辺地区，福生院周辺地区の3つの地区に分け，南は正覚寺跡地区，羅漢堂周辺地区，聖徳会館北辺地区の3つの地区に分け，計6地区の概要を述べる。

A　律学院・宗源寺周辺地区の調査

ⅰ　7－Ⅰトレンチ　河川跡（ＳＤ1001)、南北溝（ＳＤ1006)、東西溝（ＳＤ1002・1003・1005)、築地基礎（ＳＡ1004・1009）を検出した。

ＳＤ1001　トレンチ南端部と北拡張区で東肩の一部を検出した。西肩は発掘区外のために溝幅の確認はできなかったが，7－Ⅰトレンチは南北溝を縦断した形となる。溝埋土は，上層から暗茶褐色土，暗茶灰色土，黄灰色砂質土，砂礫層である。上層からは，中近世の器・瓦類が出土したが，最下層からは古墳時代の土師器高杯と7世紀代の土師器・須恵器が出土した。後述（11－Ⅱトレンチ）するが，この河川は近世初頭まで機能していたと考えられる。また聖徳会館建設予定地の事前発掘調査（1959年）において，旧福園院跡の西の築地塀（東大門を南に折れる道路の東土塀）から東へ15～18m地点を，南北方向の旧川床（幅約4ｍ）が検出されている。飛鳥時代から平安後期にかけての遺構であると報告されている事から，今回検出したＳＤ1001はこの延長であると考える。

ＳＤ1006　地表下約1ｍで検出され，トレンチの北半部におよぶ溝（幅約0.5m，深さ約0.3m）である。トレンチ内で約10m検出した。さらに発掘区外の南北に延びる。溝の肩は垂直で，埋土からは近世瓦片，磁器片が出土した。

ＳＤ1005・1002・1003　ＳＤ1005は東西溝（幅1.2～1.5m，深さ約0.3m）で室町時代の土器が出土した。ＳＤ1002・1003も室町時代の土釜・瓦が出土する溝である。

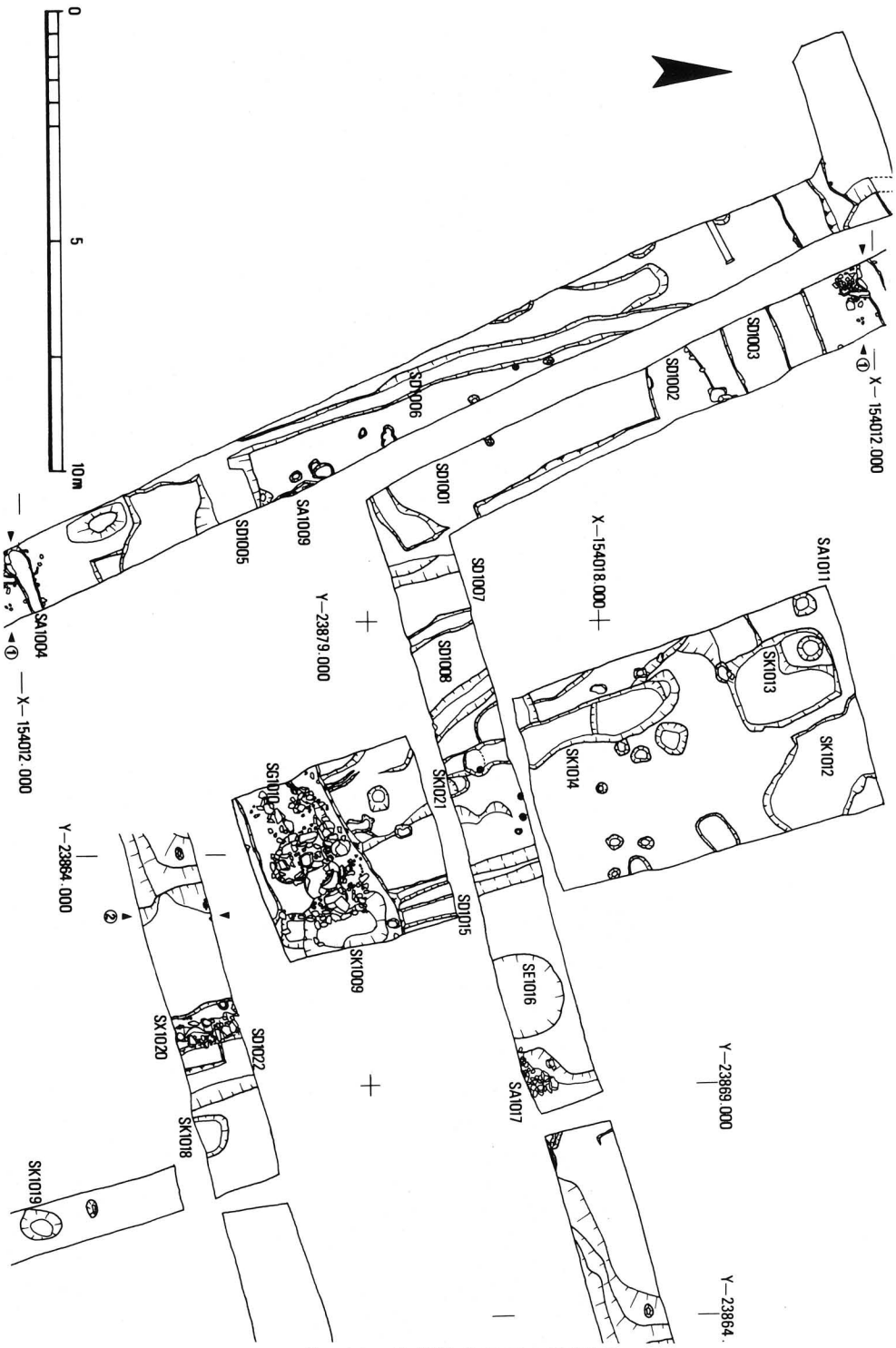
ＳＡ1004・1009　ＳＡ1004は東西方向の石積の築地基礎（幅0.7m）である。北辺に幅約0.3mの雨落溝を伴う。また，さらに北へ5ｍの所で，トレンチの東壁にわずかにその痕跡をとどめるＳＡ1009を検出した。ＳＡ1004は江戸古地図（寛政9年）によれば，発志院と福生院との境界築地の可能性があり，ＳＡ1009は子院の移動による築替と推定される。この2条の築地基礎の前後関係は，土層観察によってＳＡ1004が先行する事が判明したが，詳細は不明である。

ⅱ　7－Ⅱ・Ⅴ・Ⅵトレンチ　南北溝（ＳＤ1008)、近世の井戸（ＳＥ1016)，近世の池（ＳＧ1010)，築地基礎（ＳＡ1017)，その他大小の土壙（1014・1021）を数個検出した。

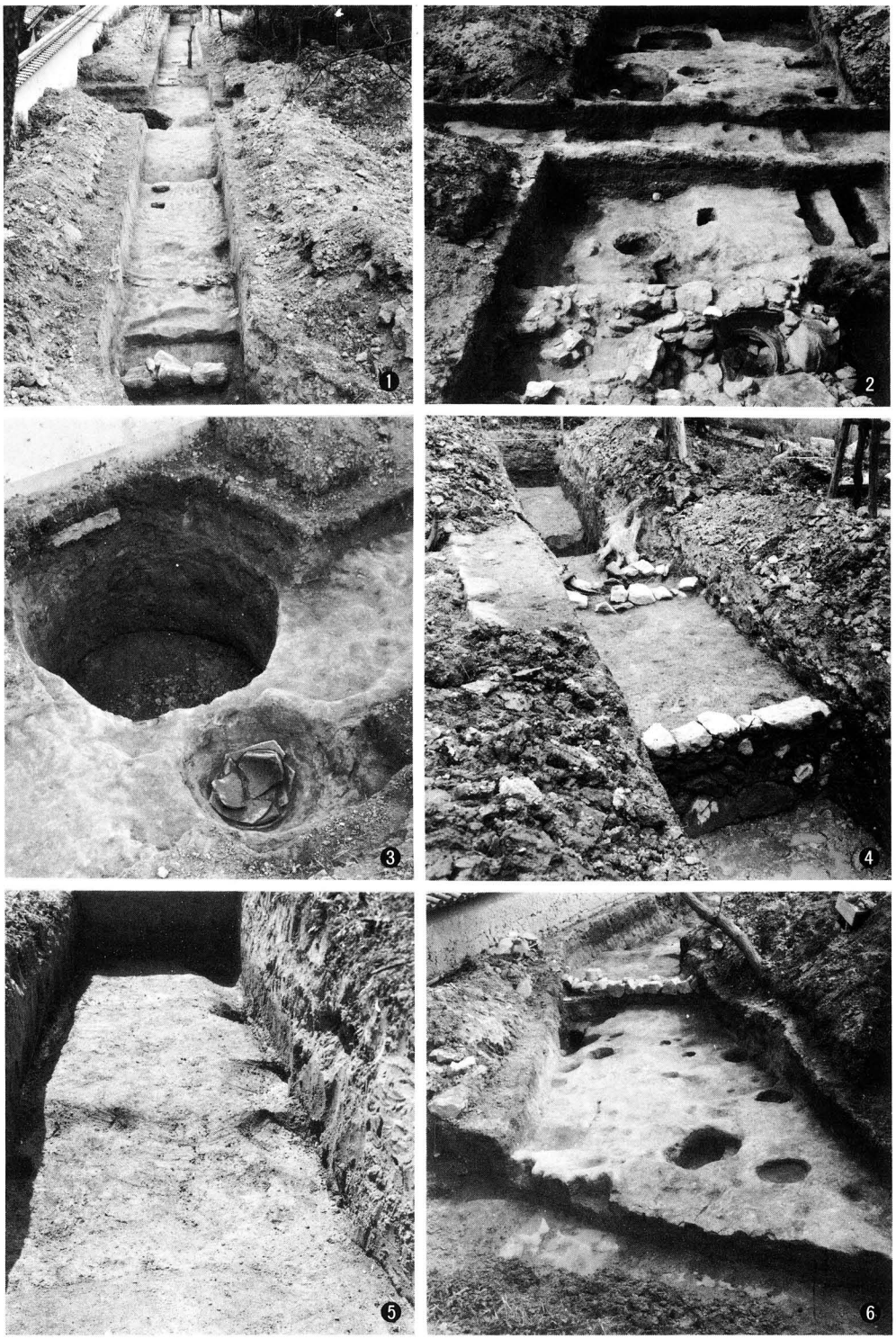
ＳＤ1008　幅0.6m，深さ0.2mで7世紀初頭の須恵器壺完形品が出土した。7－Ⅴトレンチでは西肩の一部を検出したが，後世の攪乱を受けており東肩は検出し得なかった。

第53図　律学院北の南北トレンチ(南から)

第54図　律学院北の東西トレンチ(西から)



第55図　律学院北地区の遺構図



1　石列 SX10 61と井戸1065(北から)　2　井戸1065(西北から)　3　南北溝 SD 1051(東から)
4　池 SG 1010と土壙 SK 1014(南から)　5　石積遺構 SX 1025(西南から)　6　石組 SX 1090(北から)

第56図　中間地区(北)の遺構

ＳＫ1014　溝中央を中世の柱穴に切られまた北が土壙による攪乱を受けている。しかし南の一部からは７世紀中頃の遺物が出土している。

ＳＫ1021　７世紀中頃の単弁10弁軒丸瓦，須恵器平瓶，土師器杯などが出土した小土壙であるが性格は明らかでない。

ＳＥ1016　中世以降の土器や瓦類が出土する井戸（直径1.8m，深さ1.5m）である。

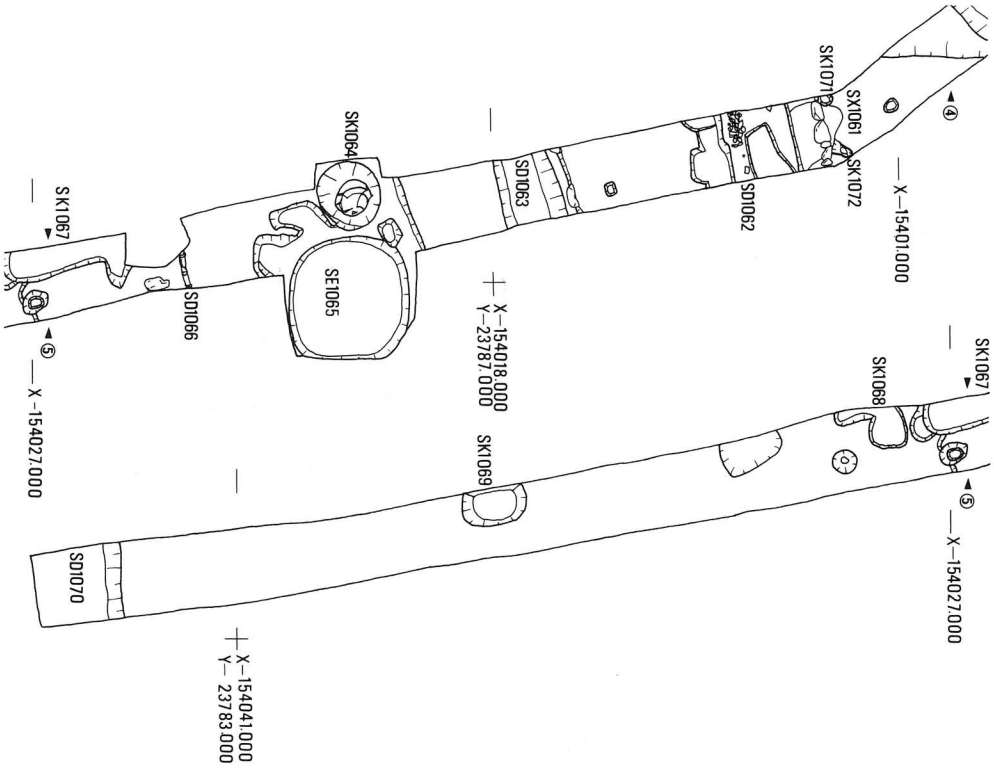
ＳＡ1017　南北方向の築地基礎（幅約１ｍ）である。北半分は攪乱を受けている。

ＳＧ1010　幅0.5m の石積溝に備前焼の大甕２個を組み込んだ泉池と思われる遺構である。石積は階段状に二段に組み，下段に大甕を組み込んでいる。大甕は一方の甕の底を穿ち，そこに他方の口縁をはめ込み，横にした状態であった。大甕を組み込んだ後に，甕の両側に石積を施している。江戸時代初期の遺構である。

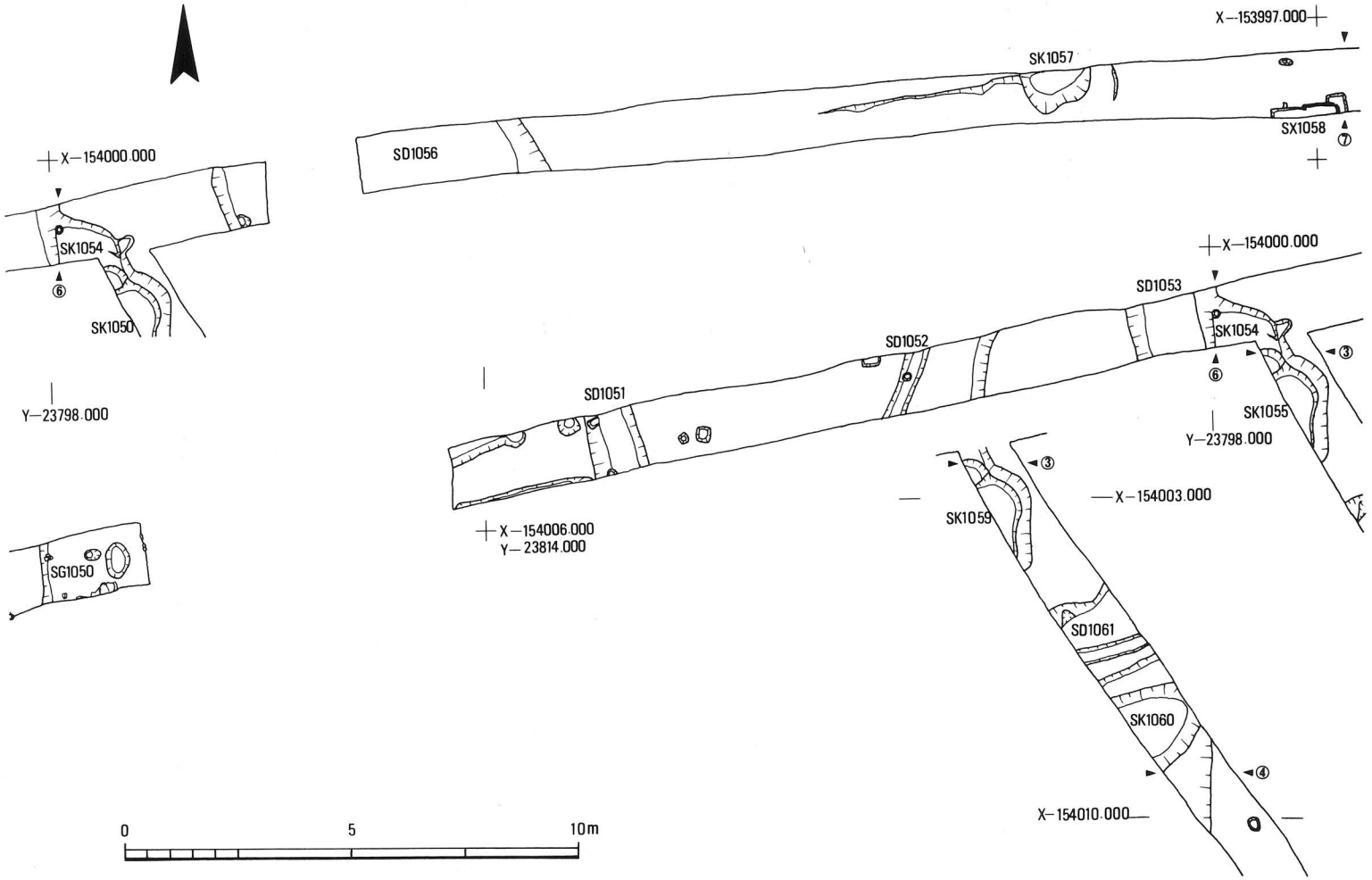
ⅲ　７―Ⅲトレンチ　トレンチ西端から，ＳＤ1008・1014の検出面とよく似た赤褐色の硬い砂質土があらわれ，南東にむかってさがる。この面からは７世紀の遺物のみが出土している。

ＳＤ1022　トレンチ東端で検出した南北溝。東肩を検出したのみで，溝幅はわからない。埋土からは，五重塔創建時の軒平瓦が出土した。

ＳＸ1020　トレンチ東端で検出した石列。溝に伴う遺構ではなく，ＳＤ1022を埋め，整地



第57図　宗源寺・福園院周辺地区の遺構図


X−153997.000
SK1057
SD1056
SX1058
⑦
X−154000.000
SK1054
⑥
SK1050
Y−23798.000
SG1050
X−154000.000
SD1053
SK1054
SD1052
SD1051
⑥
③
SK1055
Y−23798.000
③
X−154003.000
SK1059
X−154006.000
Y−23814.000
SD1061
SK1060
④
X−154010.000
0
5
10m

した後に土留めとして築いたもののようである。

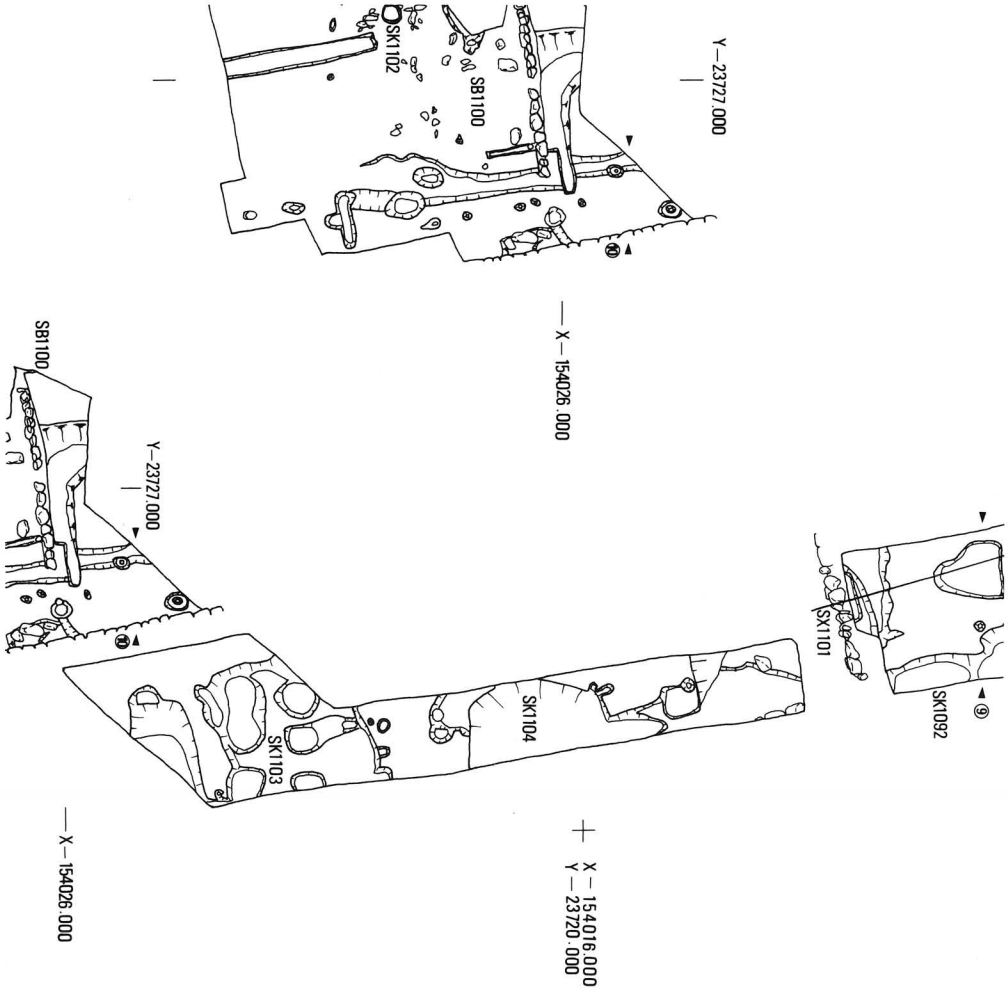
ⅳ　7－Ⅳトレンチ　中央部で幅3.6mの池（ＳＧ1023）を検出した。検出面の両岸は瓦器を含む暗褐色粘質土である。

ⅴ　8－Ⅱトレンチ　2時期にわたる池（ＳＧ1050）の西肩を検出した。前期の池はトレンチ東端から約8ｍのところで汀線を検出し，後期の池は2.5mのところで検出した。後期の池の岸には木杭3本が打ち込まれていた。出土遺物からみて，いずれの時期の池も中世以降に設けられた池である。

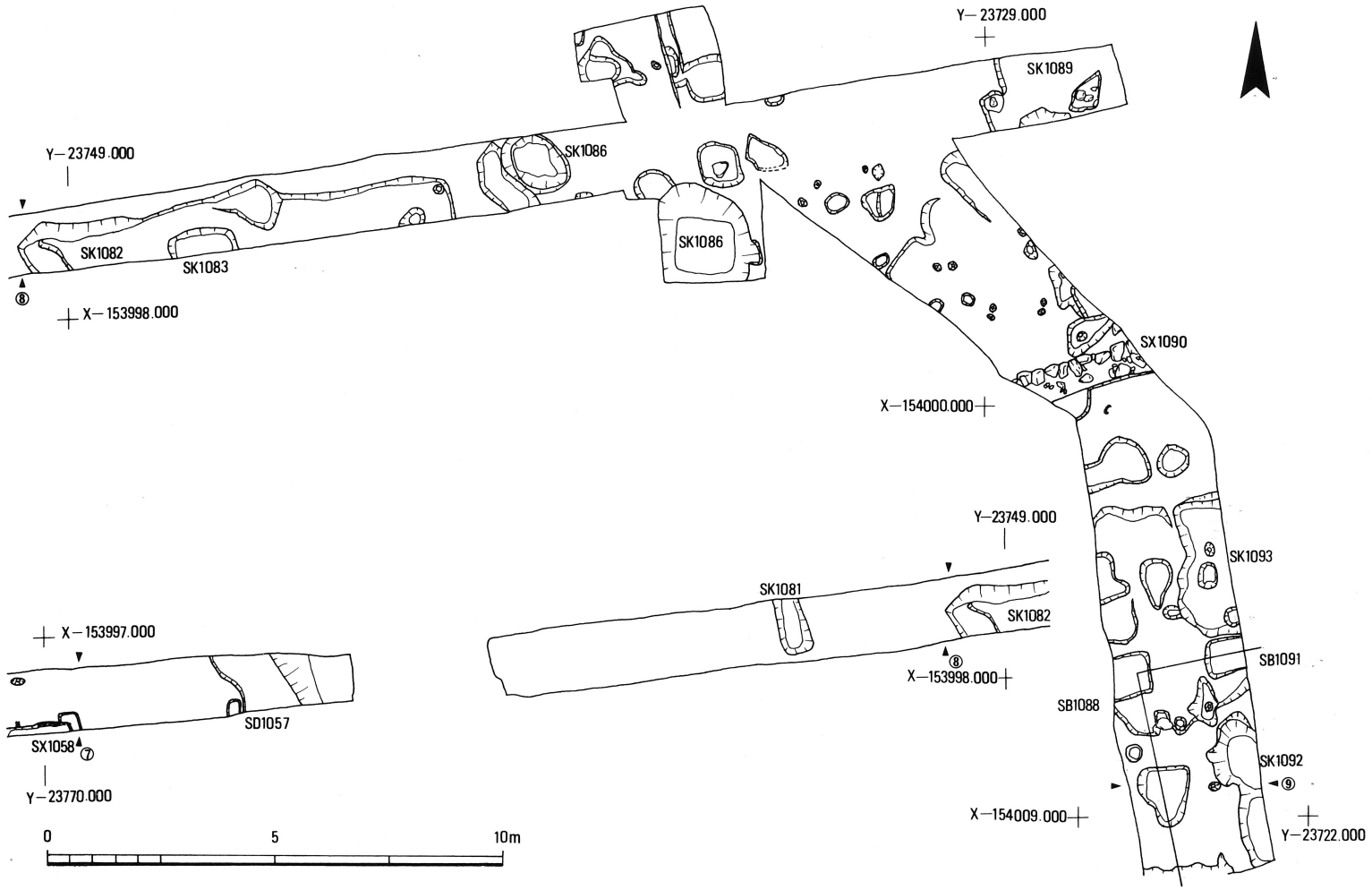
ⅵ　9－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチ　池（ＳＧ1024）と石積遺構（ＳＸ1025）を検出した。

ＳＧ04　9－Ⅲトレンチの中央部で南端を検出し埋土から中世の羽釜・土師器・瓦片が出土した。池底の黒色粘土からは人の側面形をかたどった木器が羽釜と共に出土した。

ＳＸ02　9－Ⅱトレンチ中央で検出した南面する石積で5段組みである。おそらく律学院と宗源寺を結ぶ施設と考えられる。



第58図　福生院周辺地区の遺構図


Y−23729.000
SK1089
Y−23749.000
SK1086
SK1086
SK1082
SK1083
⑧
X−153998.000
SX1090
X−154000.000
Y−23749.000
SK1093
SK1081
SK1082
X−153997.000
⑧
X−153998.000
SB1091
SB1088
SD1057
SX1058 ⑦
SK1092
⑨
Y−23770.000
X−154009.000
Y−23722.000
0
5
10m

B　福園院周辺地区の調査

ⅰ　8—Ⅳ・Ⅴトレンチ　8—Ⅴトレンチを境に再び地山面が高くなっている。トレンチ西端では地表下0.7mが地山面であるのに対し，東端ではわずか0.2mである。西端から，奈良時代の須恵器を伴った南北溝ＳＤ1051（幅1.2m，深さ8～16cm）を検出した。したがって，奈良時代にはこの地形だったと考えられる。この溝を除いて，東は8—Ⅳトレンチを含めてすべて中・近世の遺構であった。

ⅱ　9—Ⅳトレンチ　トレンチ北部で子院関係の遺構を多く検出した。石列（ＳＸ1061）暗渠（ＳＤ1062），井戸（ＳＥ1065），土壙（ＳＫ1060）等である。

ＳＸ1061　北面する東西方向の石列である。この石列を境に北と南とで0.3mの高低差があるため，擁壁としての石列と考えられる。石列の最下層（地山直上）では，直径20cm程の不定形な小穴2基（ＳＫ1071・1072）を検出した。さらに上層は木炭を多量に含んだ厚さ15cmの焼土層である。石列はこの焼土層に据え付けられていた。石列の北，約6m間はとくに低く，土壙（ＳＫ1060）となる。

ＳＤ1062　瓦・石を詰めた暗渠である。

ＳＥ1065　方形の井戸（1辺2m）である。底まで完掘していないが，深さ1.4mである事を確認した。土師器・土釜・すり鉢・陶磁器・瓦等が多量に出土した。いずれも14世紀後半から15世紀前半のものであった。

ＳＫ1060　石列の北の大土壙で，土師皿・土釜・陶磁器を含む15世紀後半の土壙。

ＳＫ1064　ＳＥ02の10cm西側で検出した備前焼の大甕を埋めた土壙である。甕は底部50cmを地山面に据え付け，半分は地表に出ていたものと思われる。復元すると高さ92cm，口径59cm，胴のはり出し部分74cmになる。肩部から胴部にかけて「二石入」と「卌」のヘラ書きがある。慶長年間の甕である。したがってＳＥ1062とは直接関連するものではない。

享禄頃には，9—Ⅳトレンチの位置は中東住院と西東住院の境にあたると指定されている。ともに享禄2年（1529）以前に造立された事が明らかにされているため，遺物との関連を考えても，いずれかの子院であると考えられる。

C　福生院周辺地区の調査

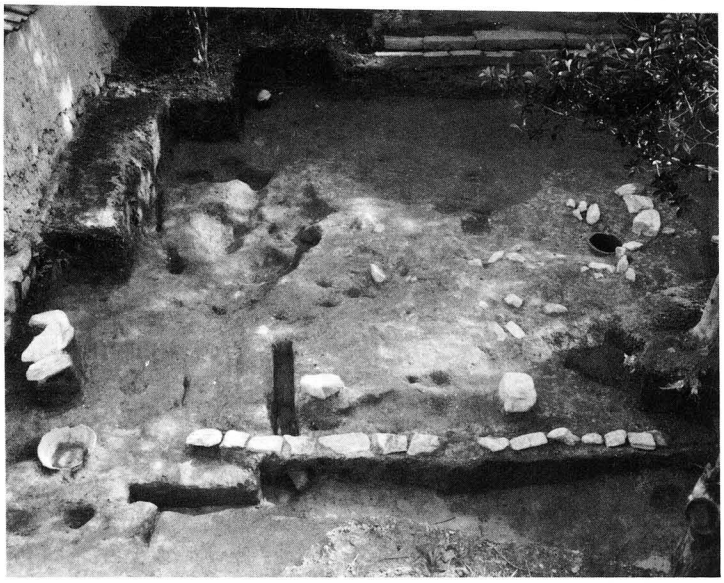
ⅰ　8—Ⅲトレンチ　福生院裏に設定した8—Ⅲトレンチでは，土壙，柱穴等を検出したがすべて中・近世の遺構であった。中世の遺構は賢聖院関係のもので，近世の遺構は東住院関係のものである。

ⅱ　9—Ⅴトレンチ　8—Ⅲトレンチの東端から南へ設定した。

ＳＢ1091　地山面で検出した堀立柱穴。東西1間分，南北2間分で発掘区外へ延びる。掘り形は長方形（0.8×1m）である。方眼北を基準にすると，北で西へ14度振れる。東院創建時の遺構に関連する柱列と考えられるが遺物は出土しなかった。

蓮光院地蔵堂跡　同トレンチ南部で蓮光院の地蔵堂跡を検出した（1100）。蓮光院は文献に

第59図　掘立柱建物
SB 1091（北から）



第60図　旧蓮光院地蔵
堂基壇（北から）

よると元弘二年（1332年）にすでに記載されているため造立はそれ以前になる。堂の記録は「宝形造二間四面屋根瓦葺高三間二尺」とある。

検出範囲は，東西南北各4ｍ北辺では東西方向の石列と，礎石と思われる平石が二個出土した。石の間隔は1.4mである。さらに南に底部を上面にした埋甕（ＳＫ1102）が出土した。西面の中間にあたる場所である。地鎮のための埋納施設であろうか。16世紀のものである。

基壇築成土の黄褐色粘土も残存していた。さらに下層では，焼土・木炭まじりの13世紀の遺物を含む暗灰褐色粘土が検出された。

D　正覚寺跡地区の調査

ｉ　82—１—Ⅳトレンチ　聖徳会館の東口，旧善住院南の正覚寺跡にあたる。正覚寺は江戸初期から明治３年頃まで続いた子院で，検出した遺構はほとんど近世のものであった。

ＳＥ1111　トレンチ中央部で検出した石積井戸。井戸掘り形が直径４ｍという大きなものに対して井戸の積石の直径はわずか0.8ｍにすぎない。積石は下方４段分が残存していた。

ＳＧ1112　ＳＥ1111の西１ｍのところで池の東肩を検出。これはトレンチ西端で検出した石積池（ＳＧ1113）の一時期前の肩であると推定される。江戸時代の池である。

ＳＧ1113　方形（１辺2.2ｍ，深さ約１ｍ）の池である。上段に軒丸・軒平瓦を多く用い瓦の固定に割竹を数段重ね木杭を等間隔に打ち込んでいる。下段は縦10cm，横30cm大の切石や割石を用いている。この石積は北辺から積み上げている。漆塗木箱，木簡等が出土した。

なお，『寺院々屋敷反別坪割張』(1870年）には，善住院の付属として本堂及び門が記されているが今回の発掘調査では検出されなかった。

E　羅漢堂周辺地区の調査

ｉ　11—Ⅰトレンチ　溝（ＳＤ1131），井戸（ＳＥ1132），土壙（ＳＫ1134・1135），掘立柱塀（ＳＡ1133）を検出した。

ＳＤ1131　地山面で検出した庄内式土器を伴う川床。川幅は約1.5ｍある。南北方向から東西方向へ曲がるコーナー部分と考えると，10—Ⅵトレンチで検出した庄内式土器を伴う川はこの延長である事も予想される。

ＳＥ1132　トレンチ西部で検出した石積井戸南半分で直径0.8ｍ。掘形は1.6ｍに復原できる。井戸中央部に息抜きの竹が刺し込まれていた。上層埋土から滑石製品が１点出土した。

ＳＡ1133　トレンチ中央部で検出した柱穴３間分である。江戸時代の掘立柱塀。

ＳＫ1134　ＳＥ1132に先行する土壙である。トレンチ内で東西３ｍである。遺物は土師器皿・瓦器等の13世紀後期のものを出土している。

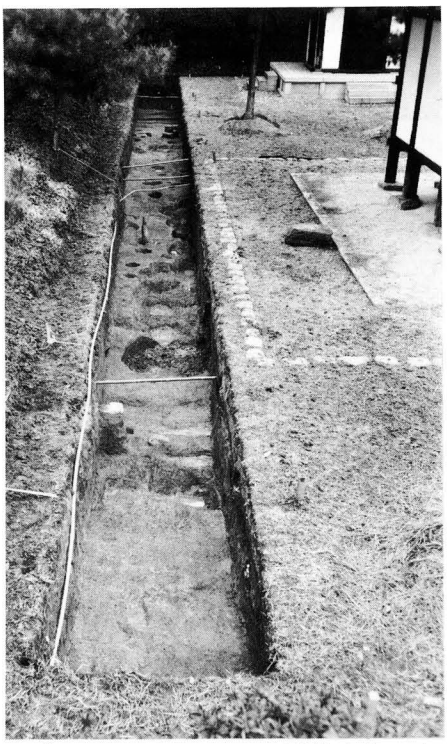
ＳＫ1135　トレンチ北東コーナー部で検出した。埋土から中国製の輸入壺片が出土した。

F　聖徳会館北辺地区の調査

ｉ　81—11—Ⅱトレンチ　河川（ＳＤ1151），斜行溝（ＳＤ1152），石積遺構（ＳＸ1153）築地基礎（ＳＡ1154），井戸（ＳＥ1155），池（ＳＧ1156・1157）及び多数の小土壙を検出。

ＳＤ1151　７—Ⅰトレンチで検出した川床跡（ＳＤ1001）の南の延長部分であり，また1959年に調査された川床に近接している。検出した川床跡は非常に複雑な層位を成しており，少なくとも４時期の流路があったものと考えられる。縞状の茶褐色粗砂が川の東肩となっており，東肩部分から順次新しい流路がおおう，どの流れも須恵器と瓦器が出土する。ま

第61図　池 SG 1113(西から)



第62図　羅漢堂地区の遺構(西から)

た当トレンチでも川の西肩は発掘区外になり検出できなかった。トレンチ内での川の範囲は8m，深さは0.3～0.5mである。なお,第2流路の黄灰色砂礫層から忍冬弁文軒丸瓦1点と瓦器が出土した。

ＳＤ1152　トレンチ南西で検出した南北溝（幅1.6m，深さ0.9m）で，トレンチ南西壁で板状材が出土した。西肩に木材の一端を架け，延長はトレンチ壁中に延びる。円形の木材を半截した転用材と考えられる。埋土の暗褐色粘質土中から室町時代の平瓦1点の平安時代の須恵器片1点が出土した。

ＳＸ1153　不定形の石積でやや方形に近い。下方3段を検出した。遺物は瓦器・土師器皿を含む鎌倉時代のものを出土している。

ＳＡ1154　土塀基礎（幅1m）である。東側には暗渠を伴っている。これは旧中道院と旧法花院との境界の土塀と考えられる。さらに東方4.2mでは建物基壇と思われる西面する石列を検出した。下層は室町時代の火鉢を含む，焼土・炭など一切含まない硬い層である。

ＳＥ1155　平瓦を立て円形に囲んだ井戸（直径25cm）である。周囲には石列，瓦敷を施す。

ＳＧ1156・1157　ＳＧ1156はＳＧ1157の一時期前の池の西肩で，江戸時代まで存続していたと考えられる。ＳＧ1156を埋め，縮小したものがＳＧ1157である。この時期と同じ頃にＳＥ1155を作ったものと思われる。